

内藤 真理子（関西学院大学日本語教育センター）

学部 1 回生のレポートにはどのような問題があり、そして指導の際、それをどう自覚させ、改善させていけばいいのだろうか。研究会では、この疑問をもとに筆者が行った実践について述べた。本稿ではその中の二つの実践とその検証について述べる。

筆者が 5 年間担当した文章表現の授業では、到達目標の一つを「適切な文体や表現技術を使った短いレポートが作成できる」とし、教員が学生に求めるレポート像を学生が共有できるように評価表を事前に配布した。また、添削時には、学生が教員の添削の意図を理解しやすくするため、1) 誤用の種類がわかるよう色分けして指摘（以下「マーカーFB」）、2) マーカーFB では意図が伝わりにくい部分にコメント付記（以下「コメント FB」）、3) 評価表にレポート全体に関するコメントを記入、4) 評価表に点数を記入、以上の 4 つのフィードバックを行った。このフィードバックを行った中間レポートと、そこから内容を膨らませた期末レポートを比較した結果、マーカーFB は、引用の修正に有効で、さらに、語彙・書き言葉・文法・ねじれ文の修正の動機付けに有効であり、また、コメントFB はアカデミック・ライティング特有の知識が必要な個所や論理性・主張の明確さが求められる部分の修正に有用であることが判明した。

後期授業の到達目標の一つは「読み手に分かりやすい構成でレポートが書ける」とした。分かりやすい構成のレポートを書くためには論理性と一貫性が重要となる。この二点に留意して書き進められるよう、前期と同様、評価表を執筆前に配布した。さらに、各文の文章全体における働きを認知する能力をつけるため、「問題提起」にはピンク、「行動説明」には黄色などと働きに分けて色を指定し、マーカーを引かせた。レポートは第 3 稿まで提出させ、それぞれの原稿に、1) 要修正箇所の指摘、2) コメントの付記、3) 評価表に点数を記入、以上の 3 つのフィードバックを行った。その結果、論理性・一貫性共に稿が進むにしたがって改善された。例えば、序論の背景と問題提起の論理展開では、第 1 稿で妥当と判断したレポートは全体の 38%であったが、第 3 稿では 80%に達した。また、全体予告と全体確認の一貫性では 60%が 85%となった。

今後の課題は、前期と後期のレポートの第 1 稿を比較することで、習得しにくい事項を洗い出し、授業設計の見直しを行っていくことである。

#### 参考文献

内藤真理子（2012）「アカデミック・ライティングの授業における学習項目を意識化させるための試み」

『日本語教育方法研究会誌』第 19 巻-第 1 号, pp. 14-15

内藤真理子・小森万里（2013）「どんな手助けがあればレポートの自己修正ができるのか—マーカー機能とコメント機能を使った作文指導の実践報告—」『専門日本語教育研究』第 15 号, pp. 41-46